

KojiMemo(37) 地球規模の危機：今がチャンス（その1）

2020-03-04 Koji Kawamura

イントロ：

神様（自然の摂理）が人類に対して（少々乱暴なやり方で）救いの手をさしのべている。

世界が、自分さえ良ければよい、自国優先主義、人のために我慢をするのはイヤだ、という風潮が蔓延している。責任を他人に押し付けて、非難し、自分の至らない点を顧みない。相手を罵る、蔑む、ことで低レベルのうっ憤をはらしている。ちまちました領土争い、覇権争い、いがみ合い、挙句の果ては殺し合いの戦争にまで発展しかねない。

数年前から気象変動が過酷さを増し、地震、洪水などの天災が、世界で頻発するようになってきた。これは、うぬぼれ上がった人類に対して地球が警告を発しているのだ、と指摘してきた。今回のコロナ問題もその一環である。隣とケンカしている暇はない。一致団結して、この試練に立ち向かわなければならない。

地球上の生物の種の絶滅の歴史が、日経新聞（2020-03-02 朝刊 page11 *1）に掲載された。今、第6次絶滅期が始まったのかもしれない。その絶滅種の中に人類？

むかし、SF 漫画や小説・ドラマなどで、世界でいがみ合っていたところに、宇宙から攻め込んできて、地球規模で団結して、協力しあって立ち向かった、というストーリーがあった。共通の敵でも現れないと、人間はまとまらないのだ。

自己の欲望を律するというのは、人間の本性に反する極めて困難なことで、精神構造の深いところでよほど何か別の規範が見出さなければならない。（不幸にして or 幸いにして）全世界レベルで難局に向き合わざるをえなくなった、このチャンスを活かさない手はない。

本 KojiMemo(37)は、2017年に発行した KojiMemo(31)防災日本(*2)に、その後の関連 Memo も加味して改訂版として発行するものである。

*1) <http://www.sparj.com/report/zetsumetsu.PDF>

*2) http://www.sparj.com/kojimemo/KojiMemo31_BousaiJapan.pdf

本文（その1）

日本、世界、地球を取り巻く多くの課題のうち、以下の主要課題への取組を提言する

- 1) 憲法改正
 - 2) 我が国の防衛のあり方
 - 3) 各種災害多発への対応
 - 4) 核廃止
 - 5) 解決の糸口のみえない沖縄問題

 - 6) 縦割り行政脱却、人口減に沿った行政の簡素化
 - 7) 国の財政危機、
 - 8) 民主主義の行き詰まり。富の偏在、不平・不満・不安からの脱却、テロ抑止
- 上記のうち6) 7) 8) は、後日（その2）で提案する予定。

1. 憲法改正

現在自民党が提示しているような9条どうのこうのというチマチマした問題ではなくて、今後の日本のあるべき姿の根本理念によって改正すべき。かつ、すべての法律は有期限とし、憲法を最長の100年とする。100年経てば、世界は大きく変わる。70年経った頃から次の100年を見越して日本のあるべき姿の基本理念を10年かけて準備議論し、方向付けを行う。次の10年で、その理念に沿ってすべての法律（条令含む）の改定案を作成する。最後の10年で具体的な社会組織、制度の構築移行準備をおこなう。

現憲法は制定後70数年経つ。まさにその準備を始める時である。次の100年を見越して、日本はどんな国になるべきなのか、何をもって世界での存在感を占めすのか・・・小職は「被災先進国としての弱み&強み」を活かして「防災日本」を基軸とすべきと考える。これを新憲法の第一条に、これまでの3原則に加える。

現憲法は、細かいことを書き過ぎている。基本理念を確立・明示するには、5箇条とはいわないまでも17条で十分であろう。数ページで済むであろうから小学校高学年でその骨子を教え、中学校では全文を学ばせる。

現在、第4次産業革命が進行し始めた、21世紀中に、産業構造、社会構造が大きく変わっていくであろう。そして21世紀中ごろには、次の第5次産業革命が芽生え始めるであろう。国の姿も今のままではなくなるのではないか、“産業”という狭い範囲ではないかもしれない。第3次、第4次までは、ICTが推進力になってきたが、つぎは地球上のすべての生命体（動植物、細菌含む）をカバーする概念になるのではないか。

2. 我が国の防衛のあり方

戦争は絶対反対、武力で問題解決はしない、といくら叫んでも、戦争はなくなることはないことは歴史が証明している。他国を侵略する意図は毛頭ないにしても、自国を防衛する最低限の戦力は持たなければならない。しかし武力拡大競争に陥ることなく、防衛力は高めねばならない。それが防災技術力を高め、自国の問題に対処するとともに、諸外国への強力な支援を行うことである。そのために「国際防災大学」および研究機関を設立し、諸外国から第一線の研究者を招聘し、研究を深めると同時に近隣諸国で発生する災害に救援と支援に国をあげて貢献する。諸外国からの信頼を勝ち取ることのほうが、高価な武器を装備するより、よほど抑止効果があると信ずる。

大学や研究機関の中心を、可能性の高い近隣諸国に地理的に近い、沖縄に設置し、関連産業の育成と活性化をはかる。沖縄を経済的発展させるとともに、日本一安全な場所とし、若者が集まるようにする。

現在防衛費は、年間5兆円を超えたが、防衛+防災で10兆円とし、防衛4兆円、防災6兆円の比率とする。トータル額は、今後増えていかざるを得ないと思われるが、この4:6の比率はキープし、日本は常に

防衛よりも防災に国力を投入していることを内外に示す。10年後ぐらいには、十分な実績と国際社会からの信頼を得たうえで、関連国連機関を沖縄に誘致する。

一時期、「モノづくり日本」を世界に向けての、日本の存在感の旗印としたときがあったが、他国の技術力向上で、その存在感は薄れた。この「防災日本」をこれから100年の日本の旗印とすべきである。

当面米国との同盟関係を維持し、抑止力に期待することは変わらないが、それは国家戦略であって。理念とは別物である。

3. 核廃絶にむけて

人類滅亡のひとつの危惧は、映画「渚にて」のシナリオであろう。これまでも政治トップレベルで、何度も繰り返し、削減の努力が続けられてきた。ノーベル賞を受けた ICAN の活動も、多くの支持を得ている。そうした努力が、心無い指導者によって反故にされようとしている。日本は率先してその活動に貢献すべきところだが、米国の核の傘に入っているからと、踏み出せないでいる。政府の弱腰が情けない。繰り返すが、理念の問題と、当面の戦略とは切り離すべきである。そうした信念のもとに米国にも働きかけるべきであろう。それが、将来の米国民のためにもなるのが明白であるからだ。

以上

<蛇足> セイタカアワダチソウの盛衰

筆者が学生の頃、通学で郊外を走る電車の窓から秋の風景

以前の日本の秋は、銀色のススキが生い茂っていたのが、年々外来種のおどろい黄色のセイタカアワダチソウに浸食されていくのに寂しい思いをしていた。その後20年ぐらいたって、その黄色がだんだん減ってきてススキが復活してきた。自然界の法則で、ある種が増えすぎると、自ら毒素を出して仲間を駆逐し始めるそうだ。地球上に人間が増えすぎて・・・